

令和五年九月三日(日) 午後一時始め

第二回 大阪定期能楽公演

能

夕霧 梅若 秀成

前蘆屋何某ノ北方 梅若 堯之

砧

蘆屋何某 福王茂十郎

大鼓 大村 滋二 太鼓 上田 亮 悟
小鼓 久田舜一郎 笛 野口 亮

従者 喜多 雅人

問 下人 善竹 隆平

(100分)

後見 山本 章弘 梅若 雅一

上野 雄介 池内光之助
地謡 山本 麗晃 大西 礼久
立花香寿子 梅若 猶義
水田 雄晤 梅若 基徳

《休憩 15分》

十五時頃

狂言

金藤左衛門

山賊 善竹 忠重

女 善竹 忠亮

後見 上吉川 徹

(20分)

仕舞

清 経キリ 山本 章弘

江 口キリ 大槻 文藏

天 鼓 梅若 猶義

船弁慶 大西 礼久

《休憩 10分》

十五時五十分頃

能

花若 田茂井律朗

安田友治ノ妻 林本 大

前小澤判新友房 井戸 良祐
後前同人

(90分) 望月

望月秋長 福王 知登

問 下人 善竹 隆司

大鼓 守家 由訓 太鼓 上田 慎也
小鼓 上田 敦史 笛 杉 信太郎

後見 梅若 修一 梅若 基徳

梅若雄一郎 井戸 和男
山本 麗晃 上野 雄三
上野 雄介 大槻 文藏
水田 雄晤 田茂井廣道

追加 十七時二十分頃 終了予定

主催 大阪梅猶会

能 「砧(きぬた)」

九州昔屋の何某は、訴訟の事で上京して既に三年の年月が経っています。故郷の事が気にかかるので、今年の暮れには帰るという文を侍女の夕霧に待たせて、妻のもとに使いに出します。一方、九州で待つ妻は便りを喜びながらも、三年間の不実を恨み、また華やかな都で夫という夕霧を羨む気持は隠しきれずに、夫を恨む言葉を口に、かえって寂しさが募ります。そこへ聞こえてきた物音。夕霧は里人が打つ砧の音だと答えます。砧と聞いて妻は一つの物語を思い出します。「昔、中国で蘇武という人が胡国に囚われていたとき、妻や子が砧を打ち、はるか遠く離れた蘇武に砧の音が聞こえた」と妻はこの物語のように、都にいる夫に届いて欲しいと砧を打ちます。そこへ都より使いが訪れ、今年も帰れないという知らせが入ります。気落ちして思い煩い病氣となり、夫を恨みながら亡くなってしまいました。(中入)ようやく故郷へと帰ってきた夫は、妻の死を嘆き悲しみ申します。その夫のもとへ現れた妻の亡霊。夫を恨んだ心の迷い故、成仏できず地獄の責め苦しんでると訴えますが、法華経の力により成仏し、去って行きます。

作者世阿弥が絶賛して、「後世の人にはこの味わいはわからないだろう」とまで言わしめた名曲「砧」は、現代では人気曲ですが、実は能としての上演は室町末期からしばらく途絶えており、その後200年あまりを経て江戸前期に観世流で復曲されました。

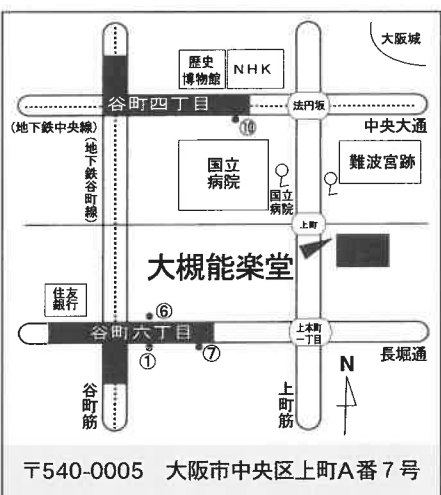
狂言 「金藤左衛門(きんとつざえもん)」

金藤左衛門という山賊が、通りがかった女を長刀でおどして、持っていた袋を奪います。ところが中の品物を見て喜んでいるときに女に長刀を奪われて...

能 「望月(もちづき)」

主人安田友治を望月秋長に討たれ、彷徨い旅する女性と少年は、近江国守山の宿に辿り着きます。この宿甲屋の主人小澤判部友房は、この二人が安田友治の奥方と花若と知り驚きます。実は友房はかつて友治の家臣で、三人は再会を喜び合います。そこへ折しも偶然に、仇の望月秋長が訪れます。仇討ちの好機と、三人は相談し、盲目の女性芸能者に扮し、秋長に近づきます。しかし、彼女の語る曾我兄弟の敵討ち物語を聞いた花若は、つい「討とう」と口走ってしまい騒然とします。友房の機転でなんとかその場を治め、花若は鞆鼓舞を、友房は獅子舞を披露することになります。酒宴の芸の面白さに、すっかり夢心地となった秋長を最後は二人で討ち果たします。

「望月」は仇討ちをテーマにした人気曲の一つで、主従の絆を強調した中世の教訓的な内容となっています。またこの曲は決して謡い舞う芸をさせるために、妻子は盲目の女芸人一行に扮して謡い舞う芸を見せ、また友房も、頭上に扇を二枚重ねて獅子の口を表して秘曲の「獅子」の舞を舞うなど、大変に芸達者なところを見せます。仇討ちに至るまでの緊張感と相成って夢幻能とはまったく違うエンターテイメント的な面白さがある能の表現をお楽しみください。



第3回 予告

2023年12月3日(日) 午後1時開演 大槻能楽堂

能	狂言	能
景	無布施経	正
清		
梅若 猶義	茂山千五郎	梅若 利成